

## Nag tsho Lo tsā ba について

川 越 英 真

### 0. はじめに

Nag tsho Tshul khriims rgyal ba (以下, Nag tsho と略称) は 11 世紀のチベット人翻訳師 (Lo tsā ba) である。Nag tsho は翻訳師として数多くのインド語仏典をチベット語に翻訳し、それがチベット大蔵経に収蔵されていることは大蔵経目録から知られる。彼が通称 ‘Nag tsho Lo tsā ba’ とか ‘dGe bśes (/Slob dpon) Lo tsā ba’ と呼ばれるほど多くの仏典の訳業に携わった背景には、インドの学僧 Atiśa<sup>1</sup> (/Atiśa = Dīpaṃkaraśrījñāna : A.D. 982-1054) をチベットへ招請することに成功し、その側近の弟子として長く師事したことが大きくかかわっている。

今日に伝わる Atiśa の伝記本のうちで、編纂年代が最も古いと見なされる Bya ḥdul ḥdsin pa<sup>2</sup> (1091-1166/1100-1174) 編著の NGA<sup>3</sup> は、Nag tsho が師 Atiśa の遺徳を讃えた『八十讚 (bsTod pa brgyad cu pa)』<sup>4</sup> と、弟子 Roṅ pa Phyag (/Lag) sor ba<sup>5</sup> の求めに応じて Nag tsho が物語った、師に関する話とに基づくと伝えられる<sup>6</sup>。だとすれば、Atiśa 招請の経緯やチベットでの Atiśa の仏教活動の様子など、Atiśa にまつわる伝承は少なからず Nag tsho に由来するものがあるはずである。その意味で、Nag tsho は翻訳師としての事績もさることながら、流伝後期 (Phyi dar) のチベット仏教の発展に多大な影響を及ぼした Atiśa の生涯が、チベットに伝承される上で果たした役割も評価されるべきであろう。

本稿は、チベット訳経史研究の一環として Nag tsho 翻訳師を採り上げ、まず Nag tsho が翻訳師として活動する前提となった Atiśa 招請の経緯を、Atiśa 伝 (NGA, JNY<sup>7</sup>) 等のチベット史書類に基づいてたどり、次に Nag tsho の本領といえる翻訳師としての事績を、史書類と蔵経本の奥書等とを対照して検討しよう。

### 1. Atiśa 招請使としての Nag tsho

Nag tsho の生年は A.D. 1011 年〈金のと亥〉<sup>8</sup> で、生地はチベット Mañ yul<sup>9</sup> 地方 Guñ thañ<sup>10</sup> 地域の lHa can gdon<sup>11</sup> である。彼が (dGe bśes) Guñ thañ pa と称されるのは、その出身地にちなんだものであるが、律にも精通したので ḥDul ba ḥdsin pa (持律師) と呼ばれることもある<sup>12</sup>。Nag tsho の生い立ちは詳らかでないが、その名前が歴史上に登場するのは、彼が Atiśa を招請する使者として Gu ge 王国の lHa btsun pa Byañ chub ḥod 王によってインドへ派遣される二十代後半からである。

Gu ge 王国は当時の西チベット mÑaḥ ris 地方が Mar yul, Gu ge, Pu rañ の三地域 (mÑaḥ ris skor gsum) から成るうちの, Mar yul と Pu rañ とに挟まれ, Manasarovar (Ma phaṃ mtsho) 湖の西北の地域に位置する。その Gu ge 王国は吐蕃王朝崩壊後、一時衰退していたチベット仏教が10世紀後半ころから復興されて行く活動の拠点となった。その最大の要因は Gu ge の王室が篤く仏教を信奉したことにある。

特に、10世紀後半から11世紀中ごろにかけての lHa bla ma Ye śes ḥod 王とその甥の子の lHa btsun pa Byaṅ chub ḥod 王の治世中は、多数の寺院建立や仏典翻訳事業などの仏教活動が目覚ましく、西チベット地方から仏教が復興する原動力になった。そうした活動の一端にインド、カシミール地方からのパンディタ (Paṇḍita) の招請があった。Ye śes ḥod が Rin chen bzaṅ po らの青年たちをカシミールへ遊学させたのも、自国の優秀な人材を仏教者として育成するためだけでなく、仏教の盛んなカシミールから学識に富む仏教者を招いてチベット仏教を再興する意図があった。

最初に Atiśa を mÑaḥ ris へ招請しようと企図したのも Ye śes ḥod という<sup>13</sup>。彼の下命を受けて、その招請使になったのはチベット中央部の gTsaṅ 地方 sTag tshal<sup>14</sup> 出身の優婆塞 (Upāśa-ka) rGya brTson ḥgrus seṅ ge である。rGya は多くの従者を連れてインドの Vikramaśīla 寺<sup>15</sup> に赴き、その寺の学頭を務める Atiśa に会い、多量の黄金を献上してチベットへの巡錫を懇願した。これに対して Atiśa は、自分がチベットへ行くには二つの動機が必要であって、一つは黄金を欲すること、もう一つは自分より他人を大切にすること、という二点を挙げ、自分には 両方とも存在しないと言って rGya の招請を断わった<sup>16</sup>。しかし、この拒否の理由が単なる口実にすぎないことは、後にチベットを巡錫した Atiśa が各地で多くの黄金の布施を受けていることや、Atiśa 自身が菩提心法者<sup>17</sup> と称されるほど Vikramaśīla 寺にいた当時から菩提心の修習を勧め、自らも慈悲の菩提心によって人々の利益を行っていたことから明らかである<sup>18</sup>。

こうして、rGya は招請使としての目的を果たせないまま、失意のうちにチベットへ帰国したが、Atiśa を慕う気持ちは強く、再びインドへ行って Atiśa から教えを受ける準備をしていた。そのころ、二十代半ばに近い Nag tsho は rGya に初めて出会った。これ以前の Nag tsho が仏教者としてどのような道を歩んで来たか明らかでないが、当時すでに出家し比丘になっていたと見られる<sup>19</sup>。rGya に出会った Nag tsho は阿毘達磨 (Abhidharma) の聴聞を請うが、rGya はインド留学を理由にそれを断った。そこで Nag tsho が随行を願い出たところ、それは許されて rGya に従って初めてインドへ行くことになった。そしてインドでは rGya から阿毘達磨の聴聞をし、また仏典翻訳の仕方も学んで、いくつかの仏典を翻訳したといわれる。Nag tsho はその仏典の将来と学資の調達のため2年後にチベットに戻ったが、他方 rGya はそのまま Vikramaśīla 寺に留まって、Atiśa のもとで学問を続けた。Nag tsho の帰国を待っていたのが、Ye śes ḥod の遺志を継いで Atiśa を招請しようと思っていた Byaṅ chub ḥod である。

ところで、Ye śes ḥod と Byañ chub ḥod の関係はチベット文献では、例えば ‘lHa bla ma Khu dbon’ と表現されることがある<sup>20</sup>。この場合の ‘Khu dbon (伯/叔父・甥)’ とは Ye śes ḥod と Byañ chub ḥod の二人を意味するが、Hod sruñ の子孫の系譜<sup>21</sup>によれば Ye śes ḥod と Byañ chub ḥod はおじと甥の子という関係で表わされるものが多い。すなわち、Ye śes ḥod の兄弟 (hKhor re または Sroñ ñe) の子が lHa lde で、彼に三人の子がいるうちの一人が Byañ chub ḥod とする。lHa lde は Rin chen bzañ po に筆頭国師 (dBuñi mchod gnas) と金剛阿闍梨の位を授け、また Khwa char 等の寺院を建て、そしてカシミールの大パンディタと称される Subhūtiśrīśānti を招いたといわれる<sup>22</sup>。従って、Gu ge 王国の王位は Ye śes ḥod, hKhor re または Sroñ ñe, lHa lde, Byañ chub ḥod という順に継承されたと見られるが、この問題はチベット史書間の記述が錯綜して一致を見ない。

さて、Byañ chub ḥod は Guñ thañ に戻っていた Nag tsho を呼び寄せて、チベット仏教の墮落した実態と Atiśa の招請に失敗したことを嘆いた。そして Atiśa を招請出来れば最上であるが、出来なければ別のパンディタを招く使者としてインドへ行くよう要請した。これに対して、Nag tsho は最初、自分の勉学の障害になるし、その目的も遂行できないと言って依頼を断わるが、結局、Byañ chub ḥod の熱意に負けて不本意ながら使者の役を引き受け、再びインドに行くことになった。それは Nag tsho が 27 歳 (A.D. 1037) の時であったという<sup>23</sup>。こうして Nag tsho は従者を伴ってインドの Vikramaśīla 寺に赴いた<sup>24</sup>。その寺では以前に師事した rGya が仏教の研鑽を積んでいたので、彼に再会して来寺の理由を話した。rGya は多くのパンディタの名前を列挙して、チベットを利益できるのは Atiśa を措いて他にないので、あくまで Atiśa を招請すべきだと Nag tsho に教示した。

Nag tsho は自分の師であり、また自分よりインド滞在が長く、インドの言葉にも熟達している rGya に全幅の信頼を置いていたであろう。それは例えば、rGya の案内によって Nag tsho が Atiśa と面会した時、Atiśa にチベットへの巡錫を願い出たのは使者役の Nag tsho ではなく、rGya であったことから窺われる。すなわち、その際に rGya は、チベットでは昔から王が仏教を信奉して流布したが、Dar ma の破仏を被った後、仏教を再興して顛倒した法を正すため、Ye śes ḥod と Byañ chub ḥod が Atiśa の招請を切望してどんなに難儀しているかなどを切々と訴えたという。この時の rGya はおそらく以前、自分が招請役の責任を果たせなかった苦い経験を思い、Nag tsho のためにいわばチベットの命運を担っているかのような気持ちで熱弁を振るったことであろう。ところが、同席した連れの Nag tsho がその時 Atiśa に対してどのような発言をしたか、何も伝えられていない。

この懇請に対して、Atiśa は自分が年老いていること、寺の管理や多くの仕事を残していることからチベットへ行けないが、もし行けばチベットの衆生を利益できるかどうか検討しよう、と答



えた。そして、Atiśa は自分の守護尊であるターラー (Tārā) に伺いを立てた結果、寿命は短くなるがチベットを利益することがわかったので、行くことを決心する。そして、後に Nag tsho の来寺の目的が露見して、寺の枢要な地位にある Atiśa のチベット行きを阻止しようとする者もいたが、結局、3年ほど Atiśa を Nag tsho に委ねるという約束で容認された。こうして Nag tsho が招請使として Vikramaśīla 寺に到着してから弟子の rGya ら従者と共に Atiśa がチベットへ向けて出立するまでに丸3年、足かけ5年の年月が経ったという<sup>25</sup>。Atiśa らのインド出立の年代に異説<sup>26</sup>はあるが、今は Atiśa が59歳の〈金のえ辰〉の年、すなわち A.D. 1040 年出立の説<sup>27</sup>に従う。

以上、Nag tsho が Atiśa の招請使としてインドに行き、招請することに成功してインドを出立するまでのおおよその経緯をチベット史書に基づいてたどった。Nag tsho は晩年、私が導師(=Atiśa)をチベットに招請したのでであると自負するように弟子に語り、後世には今日の幸福は Nag tsho の恩恵であるという評価を受けている<sup>28</sup>。確かに、招請使としての任務を果たしたのは Nag tsho ではあるが、陰の功労者と見なされるのが、弟子の Nag tsho に全面的に協力した rGya である。なぜなら、前述したように、Nag tsho が Atiśa と対面した時、Atiśa にチベット巡錫を訴えたのは rGya であり、Atiśa にとっても rGya の存在は、高齢にもかかわらずチベットへ行く決心をした一つの要因になったと考えられるからだ。それを端的に示すのは、Atiśa がいざ出発する段になって、rGya も一緒に招くよう Nag tsho に対して要求したことである。そのころ、rGya は Nālandā で熱病に罹っていたので、轎子に乗せて一緒に連れて行ったという。そこまでして rGya を帯同したわけは、おそらく rGya に通訳の役をさせるつもりだったからと思われる。そのことは rGya がネパールで死んだ時、Atiśa は自分の舌が切り取られてしまったので、チベットを利益できない。もうチベットに行く意味はない、と嘆いたことからわかる。Atiśa が Nag tsho よりも rGya の方を頼りにしていたことを如実に物語っている。不幸にも、rGya はチベットへ帰国する途中で病死したため、彼の評価が忘れられ、結果的に Nag tsho が Atiśa 招請の功を一人占めにしたともいえるであろう。

## 2. 翻訳師としての Nag tsho

チベット大蔵経には Nag tsho が翻訳・校訂者として記載される典籍は、Atiśa 小部集に重複するものを除いておよそ百典ある。それらの蔵経本の奥書から Nag tsho の共訳者名は知られるとしても、訳経処を記すものは少数であり、さらに訳経年代まで記すものはわずかに一つしかない。従って、これは蔵経本全体に通じることであるが、訳本の奥書から訳経処を知ることはあまり期待できないし、訳経年代も訳者の生没年がわかる場合、せいぜいその範囲内に限定できる程度でしかない。

そうした蔵経本の訳経事情を少しでも明らかにするため、以下に Nag tsho の翻訳活動を見る

に際して、便宜上、Nag tsho が rGya に随行して初めてインドへ遊学し、そこで翻訳の仕方を学んでから後の、主として Atiśa に師事していた時期を翻訳活動の前期とし、Atiśa の亡くなる前年に彼のもとを離れて Jñānākara に師事して以降の時期を後期として区別する。そして前期に関しては Atiśa 伝 (NGA, JNY) や DNG, KCS 等の史書類に Nag tsho の訳経活動が具体的に伝えられているので、それをチベット大蔵経目録および蔵経本の奥書と対照して訳者、訳経処、訳経年代などを検討しよう。

## 2-1. インドでの翻訳

まず前期の訳業から見てみよう。Atiśa 伝によれば、Nag tsho は最初の訳業をインドで手がけ、後に Atiśa の側近としてネパール、チベットへと行動を共にしながら諸処で翻訳活動を継続している。従って、その移動の道筋をたどれば、Nag tsho の翻訳順序とその年代をある程度限定できる可能性もあるであろう。以下はそうした視点からの一つの試みでもある。もちろん、それが妥当性を持つには、訳本の内容からの検討や典拠史料の信憑性、あるいは Atiśa の年代論<sup>29</sup> などの多面的な検討が必要不可欠であることは言うまでもない。

さて、Atiśa 伝 (NGA, 48a)<sup>30</sup> によれば、Nag tsho は rGya と共にインドへ行き、2 年ほど滞在した間に rGya から阿毘達磨を聴聞しただけでなく、仏典翻訳の仕方も学んで熟達したのでインドでも仏典翻訳を行ったという。すなわち、Nag tsho は Vikramaśīla 寺で、bDen pa gñis la hjug pa (Satyadvayāvatāra『入二諦』)とその注釈、Atiśa 作 sñiñ po bsdu ba (Garbhasaṃgraha『心髄攝集』)と Sañi sñiñ po (Kṣitigarbha)<sup>31</sup> 作のその注釈、dBu ma rin po cheñi hphreñ ba (Madhyamakaratnamālā『中観宝鬘』)などを rGya<sup>32</sup> と共に翻訳し、また Somapurī 寺では rDo rje chos kyi glu (Vajradharmagīti『金剛法歌』)<sup>33</sup>、Yogacaryā とその Piṇḍārtha<sup>34</sup> を訳出して、それらをチベットに将来したといわれる。

このうち、チベット蔵経本に対応する題目を有するのは、最初の二典の『入二諦』[T. 3902 (= 4467) : P. 5298 (= 5380)]と『心髄攝集』[T. 3949 (= 4469) : P. 5345 (= 5382)]であるが、蔵経本の奥書は訳経の場所が記されていない点と、訳者名が『入二諦』は Atiśa と rGya の二人を、そして『心髄攝集』は Atiśa と Tshul khriṃs ḥbyuñ gnas deb rtse (/tse)<sup>35</sup> という二人を記して、Nag tsho の名前を見ない点で Atiśa 伝と一致しない。しかし、『入二諦』は Atiśa が Suvarṇadvīpa (gSer gliñ)<sup>36</sup> の gSer gliñ pa<sup>37</sup> のもとで学んでいた時代に、Bhavya の『中観宝灯』[T. 3854 : P. 5254]に依拠して著作されたといわれる<sup>38</sup>。それに従うならば、Atiśa の Suvarṇadvīpa 時代に、まだチベット語に翻訳する機縁は生まれていないわけであるから、その訳出はインドに戻ってからのものである。『中観宝灯』は Nag tsho が Somapurī 寺で Atiśa, rGya と一緒に訳出したとその奥書にあるので、『入二諦』の翻訳もその奥書と NGA とに述べられる rGya がかわったとすれば、彼の存命中のインドで、しかも在留先の Vikramaśīla で行なわれた可能性が大きいであろう。

また、『心髄攝集』は、後述する sÑe thañ で翻訳されたと見なされる『心髄要攝』[T. 3950 : P. 5346]の中に多少の異字は見られるが、明らかに『心髄攝集』の本文とわかるものが、ほぼすべて含まれている。両本とも著者は Atiśa であり、また『心髄要攝』の訳者を Atiśa と Nag tsho とすることから、この『心髄攝集』も同一の訳者によって訳出された可能性が大きいであろう。すなわち、蔵経本の奥書に記す Tshul khrims ḥbyuñ gnas deb rtse という人物が Atiśa の周辺に見られないことから、Nag tsho の名の Tshul khrims rgyal ba が誤記されたことが十分に考えられる。

Atiśa 伝は他にも Nag tsho が招請使として行った二度目のインド滞在中に、Atiśa と共に翻訳したとする典籍名を列挙するが、蔵経目録に比定できない。しかし大蔵経には、Nag tsho が Somapuri 寺以外にも Vikramaśīla 寺や Nālandā 寺で翻訳したと奥書に記す典籍がいくつかある。例えば、Vikramaśīla で訳出したというものに、『多羅母三寶讚』[T. 1695 : P. 2567]と『中観優波提舍開宝篋』[T. 3930 : P. 5325]があり、前者は Atiśa との共訳、後者は Atiśa, rGya との共訳とする。また、Nālandā では、『中観迷乱摧破』[T. 3850 : P. 5250]が Atiśa と共訳されたと記されている。

このように Atiśa 伝と蔵経本の奥書とに従えば、Nag tsho はインド滞在中に Vikramaśīla 等の寺院で訳業に携わったことになる。その時期は Atiśa 伝によれば Nag tsho が rGya に随行して初めてインドに留学していた時代からとするが、奥書からはそれを知ることができない。いずれにしても、インドでの訳業は Nag tsho にとって初期のものであり、年代的には Atiśa がインドからチベットに向かって出立した A.D. 1040 年以前に限定できるであろう。

## 2-2. ネパールでの翻訳

Atiśa たちの一行がインドからネパールに到着、もしくは滞在した年代は A.D. 1041 <金のと巳><sup>39</sup>の年という (DNG, ca. 3b; KCS, 48b)。一行はチベットに向かう途次、約1年間ネパールに逗留するが、その間、Atiśa は説法、寺の建立などの他に、Nag tsho と訳業に携わっている。

Atiśa 伝(NGA, 56b-57a; JNY, 47a)は次のように述べる。当時 Atiśa が Nayapāla<sup>40</sup> 王に送った手紙は Atiśa と Nag tsho の二人が翻訳した。そして Atiśa がネパールの Hol kha という所に、友人で尊者の長老の施主によって1ヵ月滞在した時、長老が「真言ではない、波羅蜜の見解を一昼夜で仕上げて下さい」と Atiśa にお願ひした。そこで Atiśa が「長老は真言を信じないが、真言と波羅蜜の両方に菩提成就の方法がある」とおっしゃって、著作されたのが sPyod pa bsduṣ paḥi sgron me (Caryāsaṃgrahapradīpa 『行集燈』)で、Atiśa と Nag tsho の2人が訳出した、と述べる。

このうち、前者の Nayapāla 王に送った手紙は、『無垢宝書翰』(Vimalaratnālekha) [T. 4188 (=4566) : P. 5688 (=5480)]という題目で大蔵経に収められている。その奥書に、『無垢宝書翰』は Dipaṃkaraśrījñāna が Niryaḥala (=Nayapāla) に送ったもので、その当時、師 (Bla ma =



Atiśa) と翻訳師比丘 Tshul khrims rgyal ba (=Nag tsho) が翻訳した旨を述べる。しかし、手紙の本文<sup>41</sup> や奥書の記述からは、Atiśa がいつ、どこから手紙を送ったか、また翻訳した「その当時」とは一体いつの時点を指すのか、等々を知ることができない。それに対応する記述を Atiśa 伝に見るならば、手紙は Atiśa がネパールに滞在していた当時にネパールから送られ、そのチベット語への翻訳もその時に行なわれたことが知られる。

Atiśa が手紙を宛てた Nayapāla とは、8 世紀から 12 世紀にかけて東インドのベンガルとビハール地方を支配したパーラ王朝の第 11 代の王で、11 世紀前半ころに活動した人物である。パーラ王朝は歴代の王が仏教を信奉し、寺院の建立等の護持活動をしているが<sup>42</sup>、Nayapāla も篤信の仏教徒 (Parama-sauggata) であったことが明らかである<sup>43</sup>。Nayapāla の治世を在位 15 年の A. D. 1027-1043 とする見解<sup>44</sup> に従えば、Atiśa が Vikramaśīla 寺の学頭を務め、その後ネパールを巡錫していた時期はその王の治世中に相当する。

Nayapāla と Atiśa の因縁は Nag tsho の『八十讃』<sup>45</sup> に基づいて Atiśa 伝 (NGA, 36a-b; JNY, 32a-b) に、あらまし次のように述べる。

Atiśa が金剛座 (Vajrasana) にいた当時、Magadha<sup>46</sup> の王 Nayapāla と西方 Karṇa<sup>47</sup> の外教徒 (Tirthika) の王とが戦争になり、Karṇa の王は Magadha に軍隊を率いた。都城は耐えられず、住居地に軍隊が侵入して、四人の出家者と一人の優婆塞の五人を殺した。また多くの物資も略奪した。その時 Atiśa は憎み怒ることなく、慈悲と菩提心を修習していた。そのころ、Nayapāla によって Karṇa の軍が撃退され、その兵が殺されることに Atiśa は耐えられず、Karṇa の王とすべての兵を護って去らせたので、Karṇa の王は Atiśa を尊崇して、西方に招いて恭敬した。Atiśa も二人の王を和解させ、生活の物資以外の手元にあるすべてのものを和解のために手放した。また Atiśa は身命を顧みることなく、大河を何度も渡り、その二人を和睦させ親友にさせて人々を安楽にした、と述べる。

この Atiśa 伝の記述が、どの程度史実を反映しているかは別にして、こうした挿話やネパールから手紙を送ったことから見て、Nayapāla と Atiśa とが親密な関係にあったことを物語っている。

次に後者の『行集燈』[T. 3960 (=4466) : P. 5357 (=5379)] は、その奥書を見る限りでは前述の著者と訳者名以外の情報は得られないが、本文 (DE. 312b-313a) には Atiśa 伝に対応する内容が見られる。例えば、「秘密真言はここでは説くまい。波羅蜜道の行である菩薩行を私が簡略に解説しよう」(312b)、「秘密真言道を信解しないならば、以上に説いた如くなされよ」(313a)、「ネパールの国で、自分の友人が勧めたので(『行集燈』を)著作した」(313a)、といった記述は Atiśa 伝に符合するものといえる。

ところで、Atiśa はネパール滞在中に Thaṅ (/Tham) vihāra という寺を建立したといわれるが<sup>48</sup>、他にも王の建立した Rāja vihāra という寺があったとされる。Atiśa 伝はこの寺から得られた四つの仏典とその Nag tsho 訳について述べるが、類似の内容は肝心な点が食い違っていくつ

かの史書類に伝えられている。チベット史書における伝承の様態という観点からも興味深い挿話であるから、それを次に見よう。

さて、Atiśa 伝(NGA, 57a; JNY, 47a-b)は次のように述べる。

ネパールの Rāja vihāra という寺院から、出生地が Guñ than で郷里は dBus 地方である rÑog Rin can(/chen) rgyal mtshan という者が、rDo rje hbyun ba (Vajrodaya 『金剛出現』), gTsug tor dgu pa<sup>49</sup> (『九頂髻』), Khams gsum rnam par rgyal baḥi dkyil ḥkhor gyi cho ga (Trailokyavijayamaṇḍalavidhi 『三界勝曼荼羅儀軌』), sTod ḥgrel (『前半の注釈』)<sup>50</sup> という四つの仏典を入手して、Atiśa に『秘密集会』(Guhyasamāja) の法部類を請問する礼物として差し上げた。それらは Atiśa と Nag tsho 翻訳師の二人によって翻訳されたが、『前半の注釈』に関しては、Atiśa が自分で翻訳したため悪い訳になったものがある。後にその訳本を Byaṅ chub ḥod が夜に見るからと言って、こっそり盗み書きしたものがあるが、それは Mañ yulに残されて、チベット中央<sup>51</sup>には伝えられなかった、と述べる。

上記の四典がチベットへ将来される経緯は、他にも NBJ, KRN, KCS, CMB 等のチベット史書類に類似した内容が伝えられるが、その四典を誰が誰に対して献上し、それを誰がチベット語に翻訳したかという重要な点で文献間の一致を見ない。

例えば、NBJ (74b-75a) は rÑog Rin chen rgyal mtshan から『秘密集会』部類の請問のお礼に四典を献上された人物を Atiśa ではなく、大翻訳師 (Lo chen) Rin chen bzañ po とし、その翻訳に関しては、Rin chen bzañ po と彼がカシミールへ三度目の留学をした時に会った、ウディヤーナ (Udyāna) 出身の阿闍梨 Buddhaśānti (Saṅs rgyas shi ba)<sup>52</sup> とで四典を共訳したとする。また『前半の注釈』を単独で訳したのも Atiśa ではなく、Rin chen bzañ po という。

これに対して、KRN (44a) と KCS (69a) は小翻訳師 (Lo chuñ) Legs paḥi śes rab がネパールの Than vihāra で rÑog Rin chen rgyal mtshan の紹介によって Atiśa に面会した時、『秘密集会』の法部類を請問する礼物として四典のインド本を Atiśa に差し上げたので、それは Atiśa と Nag tsho<sup>53</sup> によって翻訳されたと述べる。このように共訳者に関しては NGA と同じであるが、ネパールの寺院名を Rāja vihāra ではなく Than vihāra とし、四典の献上者を rÑog ではなく、Lo chuñ とする点や『前半の注釈』の単独訳の件に触れない点は NGA や NBJ と異なる<sup>54</sup>。

他方、これらの史書類の中で最も古い成立と見られる CMB<sup>55</sup> (502a-503a) は、NBJ に類似する四典の入手経緯とその訳経した場所について、あらまし次のように述べる。

rÑog Rin chen rgyal mtshan がネパールの Vihāra という寺から入手した四典のインド本は、『秘密集会』の Jñānapāda 流の灌頂と法を請問するために Rin chen bzañ po<sup>56</sup> に差し上げた。またその翻訳は、Rin chen bzañ po が Mar yul sum mdo の Ñar ma<sup>57</sup> 寺でパンディタ Buddhaśrīśānti<sup>58</sup>, Buddhapāla, Kamalagupta の三人と会い、請願して多くの法を翻訳した<sup>59</sup>。その時、『九頂髻』や『金剛出現』等の詳細なマンドラ儀軌をすべて翻訳した、と述べる。

以上のように、各文献間の筋書きは似通っているものの、Atiśa が四典を献上されて Nag tsho



と一緒に翻訳したのか、あるいは Rin chen bzañ po が献上されて、その翻訳にも携わったのか、という肝心な点が相違する。そこで、この問題をさらに蔵経本の奥書等で検討しよう。

問題の四典は奥書によれば、いずれも Ānandagarbha (Kun dgaḥ sñiñ po) の著作とされ、瑜伽タントラに所属する注釈書、儀軌類である。そして、訳者に関して『金剛出現』[T. 2516: P. 3339]と『九頂髻』[T. 2635: P. 3460]は奥書に Buddhaśrīśānti と Rin chen bzañ po の共訳とし、『三界勝曼荼羅儀軌』[T. 2519: P. 3342]は Rin chen bzañ po の単独訳とする。残る『前半の注釈』の翻訳については多少の説明を要する。すなわち、『前半の注釈』は瑜伽部の根本タントラ『真実摂経』(Tattvasaṃgraha) [T. 479: P. 112] に対する注釈書『真性光』(Tattvāloka) [T. 2510: P. 3333]の前半部分、詳しくは『真実摂経』の第一「金剛界品」の注釈部分を意味するので<sup>60</sup>、そのように略称されるが、これは sMad ḥgrel (『後半の注釈』)と略称する後半部分と合わさって蔵経本に収められている。しかし、『前半の注釈』と『後半の注釈』という略称から推測されるように、元は別々にチベットに将来されたとし、両本の翻訳事情は異なっている。『真実摂経』の三大注釈書のうち Ānandagarbha の『真性光』は原典がなかなか入手できなかったらしく、チベット語に訳出されたのは三大注釈書中の最後であった<sup>61</sup>。

そして、『前半の注釈』の翻訳事情は前述のとおりだが、『後半の注釈』はネパールのパンディタ Thugs rje chen po (Mahākāruṇika)<sup>62</sup> と翻訳師 Zaḥs dkar<sup>63</sup> が Ñaṅ ro (/Myaṅ ro) 地方の gYar (/g-Ye) thañ 寺で Jo sras lCe ḥbar が施主になって翻訳したといわれ (NBJ, 85a; MTL, p. 67), この訳者から判断すると『前半の注釈』より後の、11 世紀後半の翻訳と見られる。こうした事情は『真性光』の奥書や東北・北京目録から知ることができないが、附属目録部<sup>64</sup>では、第一品は翻訳師 Rin chen bzañ po の翻訳、それ以降はパンディタ Thugs rje chen po と翻訳師 ḥPhags pa śes rab の翻訳と記してあって<sup>65</sup>、『真性光』は同じ訳者によって全訳されていないことが知られる。

以上に見てきたように、四典の蔵経本の奥書や附属目録部の中には Atiśa と Nag tsho の名前はどこにも現れない。Atiśa と Nag tsho の訳本が大蔵経中に採用されなかった可能性がないわけではない。だが、カシミールのパンディタに主として瑜伽タントラの聴聞を重ね、その部類の訳業も多く手がけた Rin chen bzañ po に対して、Atiśa は無上瑜伽部の特に母タントラ部類の密教を本領とする<sup>66</sup>という両者の特徴の相違を考えると、瑜伽タントラに関しては Atiśa よりも Rin chen bzañ poの方が勝れていたと思われる。実際、そうした挿話も伝えられている。すなわち、Rin chen bzañ po は、その晩年に mÑaḥ ris に招かれた Atiśa にも師事して多くの聴聞と翻訳をしたが、ある時一度、『金剛出現』を聴聞した時、瑜伽タントラに関しては自分の方が勝れていると思わせる説法であったようで、以後、瑜伽タントラ部類の法は聴聞しなかったといわれる (cf. NBJ, 76b, 85a)。

いずれにしても、四典訳出の件のような混乱した記述は、一般的に宗教的潤色の濃いチベット

史書には珍しい事例ではないけれど、その当否を弁別するのは困難を伴い、多分に問題を残さざるを得ない。

## 2-3. チベットでの翻訳

### —mÑaḥ ris での翻訳—

さて、Atiśa らはネパールで1年を過ごした後、一行はチベット国内に入った。ネパールと国境を接するチベットの Mañ yul 地方に赴き、Nag tsho の出身地である Guñ thañ 地域に Nag tsho の施主によって1年ほど滞在した。そのころ、Atiśa はチベットに水供物 (Chab gtor) の流儀がないことを知り、作 (Kriyā) タントラの六真言と六印契によって清浄に行う容易なものがあるとして Chab gtor ḥjam chuñ ma を Guñ thañ の Kha mo gra ma gdoñ という所で作った。それは今日 Dīpaṃ ma と称されるという (NGA, 57b; JNY, 47b-48a)。これは蔵経本の『水供物儀軌』[T. 3779: P. 4597]に比定される<sup>67</sup>と見られる供物儀軌であるが、その奥書 (DE. 221b: PE. 439b) によれば Kan (/sKan) ston Legs paḥi śes rab が資糧 (Saṃbhāra) を積むための一部として請うて Mañ yul の町<sup>68</sup>で著作され、Atiśa と Nag tsho が翻訳したという。

その後、Atiśa は当初の目的地 Gu ge の mTho ldiñ 寺に到着し、Byañ chub ḥod らの大歓迎を受けた。この寺は Rin chen bzañ po が Ye śes ḥod の援助のもとに建立した寺で、Rin chen bzañ po が住持を務めていた。Atiśa は Gu ge での1年を主にこの寺に逗留して説法、著述、翻訳等の充実した仏教活動を行っている。Atiśa の主著の『菩提道灯』[T. 3947 (=4465): P. 5343 (=5378)]が mTho ldiñ 寺で作られたことは確かであるが<sup>69</sup>、おそらく同じ所に自注 [T. 3948: 5344] も著作されたと考えられる。『菩提道灯』とその自注とは何故にか Atiśa の共訳者が相違しており、前者は mÑaḥ ris 地方で活動した翻訳師 rMa dGe baḥi blo gros で、後者は Nag tsho である。『菩提道灯』の奥書や附属目録部には、どこで訳出されたかまでは記さないが、Atiśa 伝 (NGA, 63a; JNY, 52b) は mTho ldiñ 寺で翻訳されたと述べる。本来、『菩提道灯』の著作は Byañ chub ḥod の要請によるものである<sup>70</sup>。その簡潔な偈文の内容を理解するために詳細な自注が用意されるのは当然のことである。従って、自注も Byañ chub ḥod のために同時的に mTho ldiñ 寺で著作され、翻訳されたと考えられる。

さらに、Atiśa 伝 (NGA, 63a; JNY, 53a)<sup>71</sup> によれば、Atiśa は sPyan ras gzigs ḥjig rten dbaṅ phyug gi sgrub thabs (『観世自在成就法』) を自らの見解に従って作り、Nag tsho と共に翻訳したと述べる。この題目からすれば、それは Byañ chub ḥod の信仰と要請に基づいて、Gu ge 滞在中に Atiśa が著作した、『秘密集会』に関する Jñānapāda 流に属する三部作の一つといわれる『観世自在成就法』[T. 1893: P. 2757]に相当するであろう<sup>72</sup>。その奥書 (DE. 233a: PE. 279a) には著者名のみで、訳者名を記さない。しかし三部作の他の二本、すなわち『秘密集会世自在成就法』[T. 1892: P. 2756]と『秘密集会讚』[T. 1894: P. 2758]は Rin chen bzañ po が Atiśa と訳出したと奥書に述べ、また附属目録部によれば<sup>73</sup>、三部作とも Rin chen bzañ po 訳とするので、そ

うであれば Nag tsho 訳とする Atiśa 伝とは一致しない。

Atiśa が mÑaḥ ris に滞在した年数は 3 年とされる (DNG, ca. 5b; KCS, 50b)<sup>74</sup>。しかし、この 3 年というのは目的地 Gu ge<sup>75</sup> に到着する以前に Mañ yul<sup>76</sup> で 1 年を過ごし、そして Gu ge を去ってインドに帰国する予定で Mañ yul に下って再度その地方で 1 年を送っているから、実際に Gu ge 地方にいた期間は約 1 年と見るべきである<sup>77</sup>。その年代は、Nag tsho が 31 歳の〈水のえ午〉の年に mÑaḥ ris に到着したというが (DNG, ca. 3b; KCS, 48b-49a)<sup>78</sup>、この場合の mÑaḥ ris 到着とは Byaṅ chub ḥod らの待ち受ける Gu ge に着いた時点を意図するであろう。その〈水のえ午〉の年は A.D. 1042 年に相当する。従って、mÑaḥ ris 地方での Atiśa の著作や Nag tsho との訳業はその前後の時期のものといえる。

#### —bSam yas での翻訳—

Atiśa らの一行が ḥBrom ston<sup>79</sup> の招請に応じて、インドへの帰国を変更してチベット中央地方へ向かい、gTsañ 地方の巡錫を経て、dBus 地方の bSam yas 寺に到着したのは〈亥(Phag)〉の年という (NGA, 73a)。この年代に関しては、同じ Atiśa 伝でも NGA と JNY とで見解を異にし、JNY は〈未(Lug)〉の年とする<sup>80</sup>。しかし、この〈未〉の年はすでに検討されているように<sup>81</sup>、JNY に述べる他の年代と矛盾する問題があつて採用できない。従って、今は〈亥〉の年を〈火のと亥〉<sup>82</sup>の A.D. 1047 年とする説を採る。

さて、bSam yas 寺は 8 世紀後半の Khri- sroṅ lde brtsan 王の治世に建立され、当時の国家仏教の中心的な役割を担った大寺院である。しかし 9 世紀中ごろの吐蕃王朝の崩壊とその後の仏教衰退期を経て、bSam yas 寺はかつてほどの隆盛はないにしても、チベットに知れ渡った名刹であった。Atiśa が訪れた当時の bSam yas 寺は Yum brtan 系統の末裔の出家者 lHa btsun Bod-hirāja 王が住持していた。Atiśa はその寺の dPe dkar (/Pe kar)<sup>83</sup> 院に住み、そこで Nag tsho と二人で Ñi khri snaṅ ba と阿闍梨 dByig gñen (Vasubandhu 世親) が作った Theg bsdus の注釈等、多くの翻訳もしたといわれる<sup>84</sup>。この Ñi khri snaṅ ba は大藏経附属目錄部等<sup>85</sup> からわかるように、Ārya Vimuktisena の『現觀莊嚴論注』[T. 3787: P. 5185]の略称である。以前、Atiśa が Sol nag Thaṅ po che に滞在した時、Khu ston が大金を布施して、弥勒の『究竟一乘宝性論』、『法法性分別』など多くの法が説かれた中の一つに挙げられている (NGA76a; JNY65b)。しかし、その藏経本は訳者を Go mi ḥchi med と rÑog Blo ldan śes rab とするのでそれに比定できないが、後者の Theg bsdus は世親『撰大乘論釈』[T. 4050: P. 5551]に該当し、その藏経本の奥書 (DE. 190a: PE. 232b) には bSam yas 寺の Pe kar 院で Atiśa と Nag tsho が訳出したと述べるので DNG の記述と一致する。

ちなみに、Atiśa は bSam yas 寺に滞在中、もともと宝物庫<sup>86</sup>であった dPe dkar 院の中に、Atiśa の聞いたことも見たこともない、インド語で書かれた密教経典や、インドでは焼失して存在しない仏典がたくさん所蔵されているのを知って驚いたという。その仏典は Khri sroṅ lde brtsan



王が Śāntarakṣita を招いて「試みの七人」を出家させ、Padmasaṃbhava がチベットの凶暴な神鬼を調伏して仏教の基礎を定めた時代のものであるというので<sup>87</sup>、それは bSam yas 寺が創建された当時の古いものであろう。Atiśa はそれらの仏典を筆写してインドに送ったといわれる<sup>88</sup>。

Atiśa 伝 (NGA, 73b-74a; JNY, 63b) は Atiśa が bSam yas 寺に逗留中、Bodhirāja の施主によって著作や翻訳をしたと述べ、Nag tsho との翻訳に関しても、いくつかの典籍を挙げる。しかし、蔵経目録との対照によって比定できるのは次のものしかない。

Atiśa 伝に述べる典籍のうち、まず Phuṅ po lhañi rab tu byed pa (Pañcaskandhaprakaraṇa)<sup>89</sup> は月称 (Candrakīrti) 作というので、蔵経本の『五蘊論』[T. 3866: P. 5267] に該当する。その奥書には「lHa btsun pa Bodhirāja の勅令と僧伽の要請によって、Tshañs pañi hbyuñ gnas 寺でインドの戒師 Dīpaṃkaraśrījñāna と大校閲翻訳師・比丘 Tshul khriṃs rgyal ba が〈亥 (Phag)〉の年に翻訳・校訂して確定した」(DE. 266b: PE. 305b) と述べるので、Atiśa 伝にいうものに相違ないであろう。この訳記にある寺名が bSam yas 寺内の小院かどうか、あるいは翻訳を要請した僧伽の寺名かとも推測されるが、Bodhirāja の勅令と記すので、Atiśa が bSam yas 寺に滞在中に Nag tsho と共訳したものであろう。また、この訳記で異例なことは訳出年を〈亥〉の年と記す点にある。この〈亥〉の年は、前述した Atiśa が bSam yas 寺に到着した同じ年以外には該当するものがないので、〈火のと亥〉の A.D. 1047 年に相当すると考えられる。

次に Atiśa 伝は hJig rten las ḥdas pañi yan lag bdun pa という訳本名も示すが、それが蔵経本の『超世間七支』[T. 2461 (=4486): P. 3289 (=5399)] という儀軌に相当すると見るならば、その奥書 (DE. 135b: PE. 170a) は Atiśa が bSam yas 寺で著作したと記すのみで、訳者に関する記述はない。しかし、大蔵経附属目録部<sup>90</sup> には訳者を Atiśa と Śākya blo gros と記すため、それが東北・北京目録に採用されている。Śākya blo gros は Atiśa の弟子で<sup>91</sup>、Atiśa との共訳も大蔵経にいくつか存在する比丘の翻訳師である。従って、『超世間七支』が Śākya blo gros との訳出であるならば、Nag tsho 訳とする Atiśa 伝と一致しない。

#### —lHa sa での翻訳—

Atiśa は lHa (/Ra) sa の hPhrul snañ 寺へ rÑog Legs pañi śes rab<sup>92</sup> (以下 rÑog ston と略称) によって招かれた。hPhrul snañ 寺はネパールから嫁いできた Khri btsun 王妃が 7 世紀中ごろに建立したという古刹である。以前、rÑog ston は東チベットの Khams に行つて hBrom ston や Khu ston<sup>93</sup> らと共に Se btsun<sup>94</sup> のもとで学び、後に dBus に戻っていたが、hBrom ston の要請に応じて、sKa (/Ka) ba Śākya dbaṅ phyug<sup>95</sup> ら dBus の有力者たちと一緒に Mañ yul まで Atiśa を迎えに行ったことから Atiśa との縁が生まれた。Atiśa 門下の一人として rÑog ston は hPhrul snañ 寺に Atiśa を招いて歓待したので、Atiśa は一冬を lHa sa で過ごした。そこに滞在中は dBus・gTsañ の有力な仏教者たちも集まって来て Atiśa に請問したので、種々の法が説かれた。その時 rÑog が中観の法を請問したので dBu ma rtog ge hbar ba (Tarkajvāla 『中観思釈

炎』を説いた。その大小二つの Man ṅag (Upadeśa) も著作して dGe bśes rNal ḥbyor pa に見るように与えたという (NGA, 80b-81a; JNY, 69b-71a)。

Atiśa 伝 (NGA, 81a; JNY, 70a) はこれに関連して、Nag tsho が訳出した本の下部に記されているという、Atiśa と Nag tsho の言葉を次のように引用する。「Ra sa の ḥPhrul snañ 大寺で釈門の比丘 rNog btsun Legs śe が請願したので、文字として記したのである」とあるのは Atiśa の言葉で、そして「御名を Mar me mdsad (=Atiśa) と称され、大学者の教義が備わっている方が誤った道を歩まれることはない」と Nag tsho Khrims rgyas は語った」とあるのは Nag tsho の言葉として引用<sup>96</sup> する。この引用文は Atiśa が著作して、lHa sa ḥPhrul snañ 寺で Atiśa と Nag tsho が共訳<sup>97</sup> したと記す、『中観優波提舍』[T. 3929(=4468): P. 5324(=5381)] の奥書に多少語句は相違するが、明らかに対応する偈文<sup>98</sup> によって確認できる。

この『中観優波提舍』は Atiśa 伝に述べる、ḥPhrul snañ 寺で著作した大小二つの Man ṅag の一つであることは間違いないだろう。しかしもう一つの Man ṅag を『開宝篋』[T. 3930: P. 5325] に比定するのは疑問である<sup>99</sup>。なぜなら、『開宝篋』の奥書 (DE. 116b: PE. 132a-b) に、要約すれば、次のように記すからだ。すなわち、『開宝篋』は Tshul khrims rgyal ba (=Nag tsho) が勧めたので、Vikramaśīla という大寺院において、尊師方の説かれたとおりに Mar me mdsad dpal ye śes (=Atiśa) が記したと述べ、続いて訳記には Dīpaṃkāraśrījñāna と翻訳師の rGya brTson ḥgrus seṅ ge と Tshul khrims rgyal ba とが翻訳したと述べる。この奥書に従えば、『開宝篋』の著作は Vikramaśīla 寺でなされ、しかも訳者の一人に Atiśa らの一行とチベットへ向かう途中にネパールで死んだといわれる rGya も加わっているため、少なくともチベットでの訳出は否定される。おそらくインドで翻訳されたものであろう。

Atiśa は『思釈炎』[T. 3856: P. 5256] を以前、Nag tsho が招請使としてインドにいたころに Somapuri 寺で説法し、それを聴聞した Nag tsho は後に『八十讃』の中でその当時のことを詠っている<sup>100</sup>。そして、Atiśa が rNog ston の請問によって ḥPhrul snañ 寺でも『思釈炎』を説いたことは Atiśa 伝から知られるが、その翻訳も rNog ston の依頼で Atiśa と Nag tsho が行なったことが史書に述べられている<sup>101</sup>。そのことは蔵経本の奥書 (DE. 329b: PE. 380a) に ḥPhrul snañ 寺で Atiśa と Nag tsho とによって訳出されたと述べることに一致する。

また、『思釈炎』の一部分 (DE. 148a-155b: PE. 161a-169a) と本文が同じである、Bhavya の『異部分派解説』[T. 4139: P. 5640] もその奥書 (DE. 154b: PE. 187b) によれば、ḥPhrul snañ 寺で Atiśa と Nag tsho が訳出したと述べる。本来、『異部分派解説』が『思釈炎』から独立して存在した典籍であるかどうか疑われているが<sup>102</sup>、両典が同じ訳処と訳者を記すことは、それを首肯させるものである。

『思釈炎』は『中観心論』[T. 3855: P. 5255] の注釈書で、その著者は両方ともその奥書に Bhavya<sup>103</sup> とするが、『中観心論』も奥書 (DE. 40b: PE. 43b) に ḥPhrul snañ 寺で Atiśa と Nag tsho とによって訳出されたと記す。その点は KCS (59b-60a) に、『中観心論』と『思釈炎』は rNog

の施主によって Atiśa と Nag tsho が訳出したということと一致する。以上のように、lHa sa での Atiśa と Nag tsho の訳出は Bhavya の中観関係の典籍が特徴的に見られる。

lHa sa での翻訳は、他にも Atiśa 伝 (NGA, 81a; JNY, 70a) に、rÑog ston が律を要請したので、dGe sloñ dañ poñi lo dri ba と dGe tshul dañ poñi lo dri ba の二つを翻訳した、と述べる。この二典の前者は蔵経本の『比丘初夏問』(Bhikṣuvarṣāgraprācchā) [T. 4133: P. 5649]<sup>104</sup> の奥書に lHa sa の Ḥod mchog dños grub 寺<sup>105</sup> で Atiśa と Nag tsho が訳出したと記すので、これに相当するであろう。また後者は同じ題目の『沙弥初夏問』(Śrāmaṇeravarṣāgraprācchā) [T. 4132: P. 5634] が蔵経本にあるが、奥書 (DE. 66a: PE. 80a) は訳者<sup>106</sup> をカシミールの戒師 Narasadeva と翻訳師 rGyal bañi śes rab とする。従って、Nag tsho らの訳本とは別のものである。

こうした中観、律などの翻訳は rÑog ston の要請と施主によって行われたものである。rÑog ston は後に Atiśa の予言に基づいて、gSañ phu の sÑeñu thog に寺を建立し (A.D. 1073)、その寺は甥の rÑog Blo ldan śes rab (1059-1109) が跡を継いで顕教の学問寺として発展するが<sup>107</sup>、rÑog ston の学問的な素地の一端はこの lHa sa 時期に形成されたと考えられる。

#### —sÑe thañ での翻訳—

Atiśa は lHa sa の南西方向に約 25 km 離れた sÑe thañ に、Bañ ston Byañ chub rgyal mtshan<sup>108</sup> の招待で行き、その後何度か出入りはあったが、結局、最後はこの地で Atiśa は生涯を終えた。sÑe thañ に行くきっかけは、ñBrom ston が Bañ ston に対して、「あなたの sÑe thañ の土地柄は良くて暖かいので、Atiśa を招くべきだ」という勧めに Bañ ston が応じて実現した (NGA, 75b; KCS, 79a)。その背景には ñBrom ston と Khu ston との確執があった。Bañ ston を含めたこの三人は、前述した Se btsun の同門という間柄であるが、ñBrom ston と Khu ston の関係はお互いをライバル視してそれほど良好ではなかった。それが端的に現れたのは、ñBrom ston が Atiśa を dBus 地方に招請するための協力を要請した手紙<sup>109</sup>の中に、当時 dBus 仏教界の有力者であった Khu ston の名前を書かなかったことである。そのことで、Khu ston が怒って ñBrom ston を詰り、以後、両者は Atiśa の巡錫をめぐるお互いにつばぜり合いを演じている。

例えば、Khu ston が Yar kluñs に Atiśa を招くと、ñBrom ston が Bañ ston に、Khu ston はとても驕慢であるから、Atiśa を心から奉仕することができるかどうかかわからないと相談して、Khu ston の Sol nag Thañ po che から Atiśa を去らせようと策を講じる。今度はそれを察知した Khu ston が Atiśa を引き止めようと必死になるといった具合である (NGA, 75b-78a; JNY, 65b-67a)。こうした ñBrom ston と Khu ston の駆け引きのもとに、Atiśa は sÑe thañ に迎えられた。

Atiśa が sÑe thañ に滞在した総年数は 6 年 (KCS, 50b) とか、8~9 年 (JNY, 84a)<sup>110</sup> といわれて一定しないが、チベットにおいては最も長い年数をそこで過ごしている。その間、チベットの dBus, gTsañ, Khams の各地から多くの人が sÑe thañ の Atiśa のもとに参集して法の請問を



した。主な人物を挙げれば、hBrom ston, rÑog ston, sKa ba Śākya dbaṅ phyug, hGar dGe ba, Gar mi Yon tan g-yon druṅ<sup>111</sup>, A mes Byaṅ chub hbyuṅ gnas<sup>112</sup>, Phyag (/Chag) Khri mChog<sup>113</sup> らがいる (NGA, 91b-92a; JNY, 79a-b)。Atiśa はこれらの聴聞者に、作タントラ (Bya baḥi rgyud) 関係の種々の成就法や儀軌を説法し、それらは Nag tsho や hBrom ston らが訳出したことが Atiśa 伝から知られるが、蔵経本に確実に比定できるものはない。

またその中で、Atiśa の作った Sems bskyed paḥi cho ga (『発心儀軌』) と徳光 (Guṇaprabha) 作の Tshul khriṃs leḥuḥi ḥgrel pa (『戒品注』) を Atiśa と Nag tsho が翻訳したと述べる (NGA, 92a; JNY, 79b; KCS, 60a)。この『発心儀軌』に類似する題目は蔵経本 [D. 3969 (=4490) : P. 5364 (=5403)] に見られるが、その奥書は Atiśa が dGe baḥi blo gros と共に翻訳し、後に Nag tsho と共に校正したと述べるにすぎない。この dGe baḥi blo gros とは、前述した mÑaḥ ris の翻訳師 rMa dGe baḥi blo gros のことで、彼は『菩提道灯』を訳出しただけでなく、法称の『量評釈』[T. 4210 : P. 5709]とその自注[T. 4216 : P. 5717(a)], 並びに Devendrabuddhi の注釈[T. 4217 : P. 5717(b)]と Śākymati のその復注 [T. 4220 : P. 5718] 等の因明関係の訳出もしている。それによって mÑaḥ ris からチベット中央地方へ因明の釈間が広がって、その系統は後の rÑog Blo ldan śes rab の翻訳に基づく「新因明派 (Tshad ma gsar ma)」に対して、「旧因明派 (Tshad ma rñiṅ ma)」と呼ばれた<sup>114</sup>。その rMa が『発心儀軌』の翻訳をしたという奥書の記述が正しいとすれば、それはおそらく Atiśa が mÑaḥ ris 滞在中のことで、Atiśa 伝にいう Nag tsho との翻訳とは、奥書にいうところの校訂を sÑe thaṅ で行なったのではないかと考えられる。

次に、『戒品注』とは、『瑜伽師地論・菩薩地』の第十「戒品」の注釈を意味し、蔵経本では『菩薩地』[T. 4037 : P. 5538] に対する徳光の注疏は、第一「種姓品」から第九「施品」までの注釈 [T. 4044 : P. 5545] と第十「戒品」疏 [T. 4045 : P. 5546] とに分かれて分類されている。その理由は前者が Atiśa と Nag tsho の共訳で、後者が Prajñāvarman と Ye śes sde の共訳した 9 世紀前半ころの旧訳という訳者の相違によって、訳本が別々に伝承されたことが考えられる。蔵経本の『戒品疏』は間違いなく旧訳であることが考察されているので<sup>115</sup>, sÑe thaṅ で Atiśa と Nag tsho が共訳した『戒品注』は、何らかの理由で大蔵経に入れられず、旧訳の方が採用されたことになるであろう。Atiśa 伝は sÑe thaṅ での『戒品注』の訳出しか述べないが、蔵経本に収められた「施品」までの注釈も同時に sÑe thaṅ で翻訳されたのか、あるいは別の処での訳出かは明らかでない。

蔵経本の中で Nag tsho が sÑe thaṅ で翻訳したと考えられるのは『心髓要撰』[T. 3950 : P. 5346] である。『心髓要撰』はその奥書 (DE. 294b : PE. 341b) に Atiśa が dBus の sÑe thaṅ 寺で著作して、Atiśa と Nag tsho が訳出したと述べる。sÑe thaṅ 寺で翻訳までしたとは記されていないが、Atiśa との共訳であるならば、Nag tsho が、最晩年の Atiśa とその寺で訳出したと見てよいであろう。Atiśa は A.D. 1054 の〈木のえ午〉<sup>116</sup> の年に sÑe thaṅ で亡くなったという。Nag tsho は Atiśa の亡くなる前年に、長年にわたって師事した Atiśa のもとを離れ、Jñānākara に師

事するためにネパールへ行き、Atiśa の最後に立ち会っていない。従って、Nag tsho と Atiśa との訳業はすべて A.D. 1053 年以前のものといえるであろう。

以上、Nag tsho の前期の訳業を検討した。これに続いて後期の訳業を見る予定であるが、紙数の都合で以下は別稿に譲る。

### 〈注〉

- <sup>1</sup> Atiśa に関するチベット文献の資料およびその研究は Eimer 1977 に詳しい。また、チベット文献を駆使して Atiśa の全体像を解明した羽田野伯猷博士の一連の Atiśa 研究は有用である。
- <sup>2</sup> 通称は (dGe bśes) Zul phu ba (chen po) という。DNG, kha. 8b-9a によれば、Roñ pa Phyag sor ba の弟子 Bya ḥdul ḥdsin は gTsañ 地方 Roñ g-yuñ で〈金のと末〉の年 (A.D. 1091) に生まれた。ḥBre chen po から出家し、法名は brTson ḥgrus ḥbar と付けられた。Sog, rGya ḥdul ḥdsin, rMa tsho らから律を聴聞して博学になった。また別の師からも中観、因明、瑜伽、カーダム法などを学んだ。後に、Zul phu に講法堂 (bśad gra) を創設した。76 歳の時、Zul phu の寝室で亡くなったという。Bya の生没年の異説は、KCS に Bya ḥdul ḥdsin は gTsañ の Roñ g-yuñ で父 Bya rGyal ba ḥbar の三子の中の子として〈金のえ辰〉の年 (1100) に生まれた (KCS, 337b) と生年を述べ、没年は 75 歳の〈木のえ午〉の年 (1174) に Zul phu の寝室で示寂した (KCS, 338a) と述べる。ちなみに、RMB, 3a; PRM, p. 11 は生年を DNG と同じ 1091 年とする。
- <sup>3</sup> NGA の研究として、Eimer 1979a は NGA およびそれと密接な関係にある JNY に関して、テキストとその内容を分析し、NGA と JNY の相互関係等を論じた研究に加えて、NGA の抄訳と固有名詞索引から成り、Eimer 1979b は NGA のテキストを JNY と対照した校訂ローマ字テキストで、その異同の注記と DNG, KCS, KRN 等の参照を付記している。
- <sup>4</sup> NGA, 96a, 103a; JNY, 83a, 91a によれば、Nag tsho 『八十讃』の作成由来は次のようである。Atiśa は生前 Nag tsho に対して、私の姿を描き、兜卒天から私を招請して善住を立派に為せと言ひ渡していた。そこで Nag tsho は Atiśa の死後、インド人の画師に頼んで Atiśa の肖像を中心として、周囲に Atiśa の守護神と弟子たちの像などを一枚の綿布に描かせた。その裏面に Nag tsho 自身が Atiśa を礼讃する八十の讃偈を書いて善住式を行なったという。この『八十讃』は NGA, JNY, KCS 等、多くの史書類に部分的に引用されているが、後に Sañi sniñ po の作った讃偈が『八十讃』に混入され、さらに偈数が増広されて、その全文が LKD, 15b-20a に収載されている。『八十讃』に関しては Eimer 1977, pp. 142-145, 305-325; Eimer 1983, pp. 1-8; Eimer 1989, pp. 21-38 を参照。
- <sup>5</sup> Roñ pa が Nag tsho のもとを訪ねて、Atiśa のことを尋ねるまでの経緯は、NGA, 106b-107a; JNY, 94a-b; DNG, ca. 35b-36a; KCS, 336a-b; KRN, 81b-82b を参照。その要旨は次のようである。Roñ pa は ḥBrom ston を始めとする Atiśa の直弟子七人 (八人とするのは Nag tsho も含めての数) と孫弟子二人に Atiśa の来歴と成就の教誡を訊ねたところ、直弟子たちの言うことは一致していたが、孫弟子たちの言うことは一致しなかった。そこで Roñ pa は直弟子の一人の Nag tsho に会う必要があると考えて、Guñ thañ の Yañ thog 寺に Nag tsho を訪ねた。結局、Roñ pa は Nag tsho のもとで 3 年ほど師事した間に、彼から Atiśa の教誡や Atiśa がどのようにしてチベットに招かれて巡錫したかのいきさつを聴くことができたという。
- <sup>6</sup> Roñ pa が Nag tsho から聴聞したことは、元は rMa tsho Byañ chub rdo rje の随法者で、後に Roñ pa の四大弟子と呼ばれた者たちによってそれぞれ記録が作成されたが、その一人 Bya ḥdul ḥdsin はそれをまとめて Atiśa の詳細な伝記を編纂したという (cf. NGA, 107b-108a; JNY, 94b-95a)。
- <sup>7</sup> JNY は sNar thañ 寺第七代管長の mChims Nam mkhañ grags(?-1285/1288/1289) の編纂。

NGA と JNY の関係は Eimer 1977, pp. 192-213 に詳しく考察されている。

- <sup>8</sup> DNG, kha. 12a, ca. 3b; KCS, 67b; KSN, 5b; RMA, 11b; PSJ, p. 368; PRM, p. 6.
- <sup>9</sup> Mañ yul は mÑaḥ ris smad から gTsañ の La stod にまたがる地域で、ネパールと国境を接し、その中心地は sKyid groñ である。
- <sup>10</sup> Guñ thañ は Mañ yul 地方の rDsoñ kha を中心とする地域である (cf. Ferrari, 1958, p. 154, n. 548)。
- <sup>11</sup> YJC, p. 91 に ‘Guñ thañ lHas can gdoñ ba Nag tsho tshul krims rgyal ba’ と述べ、また lHa can gdoñ/lHas gdoñ (NGA, 47b/JNY, 39b) に Nag tsho の親族が住んでいるという記述に拠って生地と見なした。
- <sup>12</sup> Cf. NGA, 49a; JNY, 39b.
- <sup>13</sup> Cf. NGA, 46b; JNY, 38b; KGT, da. p. 291.
- <sup>14</sup> Ñaṅ (/Myaṅ) chu という、rGyal rtse を通過し gShis ka rtse を経て gTsañ po (/Yar gtsaṅ po/Yar kluṅs gtsaṅ po) 河に注ぐ川の上流地域 Ñaṅ (/Myaṅ) stod に sTag tshal はあり、その地方の Phum bu ri rgya stod/Phum bu ri (CMB, 506a=Khum bu) が rGya の生地で、学問は sTag tshal で学んだという (cf. MTL, pp. 113-115, 120)。
- <sup>15</sup> Vikramaśīla 寺は今日の Bihar 州, Bhagalpur 地方, Patharghata 附近の Antichak 村にあったという (cf. Chaudhary 1975, pp. 2-3)。
- <sup>16</sup> NGA, 46b; JNY, 38b.
- <sup>17</sup> NGA, 58b; JNY, 49a; この点に関しては羽田野 1960 に詳しい。
- <sup>18</sup> NGA, 37b; JNY, 25b.
- <sup>19</sup> Cf. JNY, 39b; DNG, ca. 2b.
- <sup>20</sup> 次のような用例がある。‘lHa bla ma Khu dbon’ (NGA, 51a; JNY, 41b, 42a; KCS, 46a), ‘mÑaḥ ris kyi rgyal po lHa bla ma Khu dbon’ (NGA, 65b; JNY, 54b), ‘Ye šes ḥod khu dbon’ (PSJ, p. 360)。
- <sup>21</sup> Cf. Tucci, 1956, pp. 51-60.
- <sup>22</sup> RZN, 19b; DNG, kha. 3b; KCS, 66a.
- <sup>23</sup> NGA, 48a-49a; JNY, 39b-40b; KCS, 44b-45a.
- <sup>24</sup> 当時の寺院の一端は Nag tsho 『八十讃』 (NGA, 40b; KCS, 41a; KRN, 25a; LKD, 16a-b) に、‘o tan ta yi pu ri na || rab tu byuñ ba brgya phrag phyed dañ gsum || bi ka ma ni śi la na || rab byuñ brgya phrag ma loñ tsam ||’ (NGA, 40b) 『Odantapurī』には出家者が 53 人、Vikramaśīla には出家者が 100 人ばかりいる」と詠われている。
- <sup>25</sup> Cf. NGA, 55a; JNY, 45b.
- <sup>26</sup> KRN, 33b は Atiśa が 57 歳の〈寅〉の年にインドから出立したと述べ、異説として 59 歳〈金のえ辰〉の年の出立と、61 歳の年の出立という (チベット人による) 主張があることを紹介する。また RMB, 1 の ‘1037 年〈火のと丑〉’の項に ‘bsTod pa (讚) によれば, Jo bo (=Atiśa) が (チベットへ) 行かれたと述べる」とある。この ‘bsTod pa’ は Nag tsho の『八十讃』ではなく、別人の作であるが、明らかでない。
- <sup>27</sup> DNG, ca. 3b; KCS, 48b.
- <sup>28</sup> Cf. NGA, 97a, 107a; DNG, ca. 9b.
- <sup>29</sup> 羽田野 1966 は DNG などに述べられる Atiśa の年代設定に対して、異説の可能性を考察しているが、当面は DNG, kha.5a, ca.3b, ba.11a-b の説に従う。
- <sup>30</sup> JNY, 39b に NGA, 48a と同様の内容が見られるが、rGya が翻訳に携わったとは述べない。これに対して、KCS, 59b は Vikramaśīla 寺で『入二諦』とその注釈、『心髄攝集』とその Saḥi sñiñ po 作の注釈、『中観宝鬘』等は Atiśa と rGya の 2 人によって最初に翻訳されたと述べて、Nag tsho の名を挙げない。
- <sup>31</sup> KCS, 64b によれば、パンディタ Saḥi sñiñ po は以前、Atiśa の友人であった。秘密真言に関して内外の区別をするのが困難であったのを Atiśa が善妙に区別して説かれたので、Saḥi sñiñ po



- は Atiśa を信奉して後に弟子になったといわれる、とある。また KCS, 35b によれば, Atiśa 自身が, 内外の区別に精通する者は師 gSer gliñ pa と Śānti pa と私 (Atiśa) と私の弟子の Sañi sñiñ po の四人しかいないと語った、という。ここでいう秘密真言の内外の区別とは、密教聖典の教判として階梯別に分類することを意味し、その場合、内外の内とは瑜伽部階梯以上を指すであろう。Atiśa 自身は『菩提道灯難語釈』[T. 3948] (DE. 287a-b) から知られるように、七分類を採用したが、後の Bu ston の四分類が一般的になった (cf. NGA, 14b-15b; JNY, 11b-12b)。
- <sup>32</sup> NGA, 48a のテキストは, 'lo tstsha ba che chuñ gñis kyis bsgyur' (「大・小二人の翻譯師が訳した」) とあるが、その細字注に 'che' を 'rGya', 'chuñ' を 'Nag tsho' と記すことに従った。
- <sup>33</sup> Atiśa 伝 (NGA, 26a; JNY, 5b) は Somapurī で Atiśa の謡った歌を rGya と Nag tsho が文字にして、それを Atiśa と Nag tsho が翻訳したという。これは蔵経本に比定できないが、例えば『Dīpaṃkaraśrījñāna の法歌』[T. 2374: P. 3202] のような類を指すのかもしれない。
- <sup>34</sup> テキストは 'go ga tsar ya dañ | deñi pi dhar ta' (NGA, 48a), 'yo ga tsarya dañ | deñi pi nar ta' (JNY, 39b) とあるが、比定できない。
- <sup>35</sup> 東北目録 [T. 3949] の翻訳者の項の de brtse は同書奥書 (DE. 293b), 附属目録部 (DE. 441a) によれば deb rtse の誤記。[P. 5345] の奥書 (PE. 340a) と TKA, 93b は deb rtse とする。しかし CBC, 163b は Tshul khriṃs ḥbyuñ gnas として deb rtse を欠く。また, Atiśa 小部集 [T. 4469: P. 5382] の奥書 (DE. 8a: PE. 10a) には Tshul khriṃs ḥbyuñ gnas shi ba とある。Atiśa と関係ある人物でこの名前に類似するのは、例えば DNG, ca. 10b に列挙された弟子の中に Tshul khriṃs ḥbyuñ gnas がいるが、この者の素性は知られない。
- <sup>36</sup> NGA, 10b によれば、閻浮提 (Jambudvīpa) の近くの、種々の宝石を有する島であるから gSer gliñ と称する、という。Suvarṇadvīpa はスマトラに比定されている (羽田野 1960, p. 156)。
- <sup>37</sup> gSer gliñ pa Chos kyī grags pa (Dharmakīrti) については Atiśa 伝 (NGA, 10b-13a, 28b-30b; JNY, 20b-24a) に詳しい。gSer gliñ pa は Atiśa に対して教の門を開き、修心 (Blo sbyon) の次第を授けた師で (NGA, 10b; JNY, 20a), Atiśa は Suvarṇadvīpa で 12 年ほど師事した (NGA, 30b; JNY, 23b)。
- <sup>38</sup> 江島 1983, pp. 381, 385 (注 21) を参照。
- <sup>39</sup> 異説は RMB, 1 の '1038 年 <土のえ寅>' の項に『『讚 (bsTod pa)』によれば, (Atiśa が) ネパールに到着』とある。
- <sup>40</sup> テキストは Neyapāla (NGA, 56b), Nayapala (JNY, 47a) とあるが、刻文 (Bhattacharya 1996, p. 322), 写本 (Bendall 1883, p. 175: Add. 1688) の Nayapāla を採用する。チベット語表記の異字は他にも、次の例のように種々見られる。Niryapāla (KGT, da, p. 324), Niryaphala ([T. 4188] DE. 71b), Niryapāla (KGT, da, pp. 291, 296), Nairyapāla (KCS, 38b, 39a, 55b), Nairyaphala (LKD, 19a), Nairyaphāla (LKD, 20a)。
- <sup>41</sup> Chattopadhyaya 1967, pp. 520-524 に英訳が、また Dietz 1984, pp. 65-67 に解説と pp. 302-319 にローマ字テキストと対照した独訳がある。
- <sup>42</sup> パーラ王朝初代の王 Gopāla I 世 (A.D. 750-775) は Odantapurī 寺, 第 2 代の Dharmapāla (775-812) は Vikramaśīla 寺, 第 3 代の Devapāla (812-850) は Somapurī 寺を建立した (cf. Dutt 1962, pp. 354-376. カッコ内の統治年代は Sircar 1977, pp. 967-968 に拠る)。
- <sup>43</sup> Bhattacharya 1996, p. 316; Bendall 1883, p. 175: Add. 1688.『無垢宝書翰』によれば, Nayapāla は Mahāghati に生まれ、仏教を広めて、国政を仏法に基づいて守ったと述べる (cf. [T. 4188] DE. 70a)。
- <sup>44</sup> Cf. Sircar, 1977, p. 968. Nayapāla の在位年代に関しては, A.D. 1038-1055 (Majumdar 1943, p. 177) など諸説ある。
- <sup>45</sup> NGA, 36b; JNY, 32b; KCS, 39a (以下の偈文テキストは NGA に拠る。カッコ内の異字は JNY)
- dGe bśes Lo tsā bañi bstod pa nas |  
dGe bśes Lo tsā ba (=Nag tsho) の讚の中に、

rgyal po ne ya pā la dañ || nub phyogs ka rṇaḥi(/rṇaḥi) rgyal po gñis ||  
 Neyapāla 王と西方 Karṇa の王との二人の間に  
 rtsod pa chen po byuñ baḥi tshe || nub phyogs ka rṇaḥi(/rṇaḥi) rgyal po yis ||  
 大紛争が起こった時、西方 Karṇa の王は  
 ma ga dhar ni dmag drañs pas || groñ khyer ma thub gnas gshir drañs ||  
 Magadha に軍隊を率いたので、都城は耐えきれず、住居地に（軍隊が）率いられた。  
 rab byuñ dge bsñen lña yañ bsad || yo byad mañ po gnañ(/gnañs) du(/su) khyer ||  
 出家者と優婆塞を五人も殺し、多くの物資を略奪した。  
 khyod la she sdañ mi mñañ bas || ko loñ ma(/mi) mdsad sñiñ rje ḥkhruiñs ||  
 あなた（=Atiśa）には憎むことが無いので、怒ることをなさらず、悲心が生じた。  
 g-yul bzlog(/log) tshe na dmag mi bskyabs || phyi nas bla mas sdums(/sdum) mdsad de  
 ||  
 敵軍を撃退する時に兵士を護った。後に師（=Atiśa）が和解をさせて、  
 ḥtsho baḥi yo byad ma gtogs paḥi || yo byad lhag ma med par btañ ||  
 生活の物資を除いた物を残らず手放した。  
 lus dañ srog la ma gzigs par || chu bo chen po yañ yañ brgal ||  
 （Atiśa は）身体と生命を顧みず、大河を何度も渡った。  
 de gñis bzlum(/sdum) nas mdsañ bor mdsad ||  
 その二人を和睦させて親友になさった、  
 ces gsuiñs so ||  
 と述べられている。

<sup>46</sup> Nayapāla をマガダの王と呼ぶのは、『八十讃』の ma ga dha yi bdag po ni || rgyal po nai rya pā la yin || (KCS, 55b; LKD, 19b-20a) に基づく。Dietz 1984, p. 303, n. 2 は『無垢宝書翰』に Nayapāla の生地を Mahāghati とあるのが Magadha と混同されたという。

<sup>47</sup> 注 45 に示した『八十讃』の 'ka rṇaḥi rgyal po' という語句は、それに基づく 'ma ga dhaḥi rgyal po ne ya pā la dañ | nub phyogs ka rṇaḥi mu stegs kyī rgyal po gñis' (NGA, 36a; JNY, 32a-b) という表現を見れば、王名ではなく、国名もしくは王朝名として Atiśa 伝に述べられていることがわかる。これに対して、インドの研究者は Majumdar 1943, p. 180 'the Kalachuri king Karṇa' とか Sircar 1977, p. 965, 'this Karṇa is undoubtedly the Kalacuri king who ruled in 1040-71 A.D.' と述べ、王名と見なしている。Kalacuri 王国の首都は Tripurī で、現在の Jabalpur 附近の Tewar であるという (cf. Sircar 1971, pp. 333-334)。

<sup>48</sup> NGA, 57a; JNY, 27a, 47a. Thaṇ vihāra は今日のカトマンドゥの Thaṇ Bahī に比定される (cf. Locke 1989, p. 100)。

<sup>49</sup> この典籍を Eimer 1979a, p. 385 は [P. 903] の可能性を、羽田野 1959, p. 41 は [T. 2626] 他の推定をする。それらを採らず、[T. 2635: P. 3460] を当てた理由は CMB, 502b に gTsug dguḥi (CMB: sguḥi) cho gaḥi dkyil ḥkhor cho ga とあり、それが gTsug dgu のマンダラ儀軌を指すことと (cf. TKA, 59a)、本文で述べた訳者と相違することとに拠る。ちなみに gTsug dgu は蔵経本 [T. 485: P. 117] の略称で (cf. NBJ, 40b), sByoñ rgyud ma bu (cf. NBJ, 78a, 83a, 85a) という場合の Ma (母) [T. 483: P. 116] に対する Bu (子) に相当する。

<sup>50</sup> Eimer 1979a, pp. 466-467 は sTod ḥgrel を蔵経本に比定 (TT, Nr. 2045 は Nr. 2049 の誤記) する推論を述べるが、誤りである。

<sup>51</sup> テキストは 'Bod' とあるが、この場合は Mañ yul との対比でチベット中央地方の dBus・gTsañ を意味すると解釈した。

<sup>52</sup> NBJ, 75a によれば, Sañs rgyas shi ba は Udyāna の戒師 (mKhan po) Nor bu gliñ pa bDe baḥi rdo rje の弟子とするが、異説として両者は密号と本名の違いによる同一人物とか、Śraddhākaravarman の弟子とする説も示す。

<sup>53</sup> KRN, KCS のテキストは 'jo bo dañ lo tsā bas bsgyur' とあるが、この lo tsā ba は Legs paḥi

śes rabではなく Nag tsho を指す。

- <sup>54</sup> KRN, KCS, CMB は『前半の注釈』の単独訳と Byaṅ chub ḥod の盗み書きの件に触れない。
- <sup>55</sup> CMB の作者 Ñaṅ ral Ñi ma ḥod zer の生没年は A.D. 1124-1192 または 1136-1204 の二説がある (cf. CMB, Meisezahl, Verbemerkungen, p. 9)。
- <sup>56</sup> CMB, 502b に Rin chen bzaṅ po の語はないが、文脈から見て Rin chen bzaṅ po である。
- <sup>57</sup> Ña ma (CMB, 502b). Ñar ma は CMB, 500b; RZN, 19b によれば, Ye śes ḥod が Mar yul 地方に建てた寺である。
- <sup>58</sup> CMB はテキスト全体に綴り字の誤記, 脱落等が多く見られ, 例えば, Buddhaśrīśānti は bhu ta śi śan ti ba と表記されているが, 訂正して示す。他の事例も同様にして, 個々の注記は省略する。
- <sup>59</sup> この訳経に関連する記述が Atiśa 伝 (NGA, 57a; JNY, 47b) に, その後, パンディタ Buddhaśrīśānti と Kamalagupta (Kamakuta=NGA, JNY) が Mar(/Maṅ) yul sum mdo に招かれて, 根本から翻訳し直して確定した, とあるが, Rin chen bzaṅ po の名は示されない。
- <sup>60</sup> DNG, ja. 2b; TKA, 54b に拠る。従って, 『後半の注釈』とは『真実撰経』の第二「降三世品」以降の注釈を意味するであろう。
- <sup>61</sup> Cf. NBJ, 72b, 74a-b, 75a, 77b, 85a.
- <sup>62</sup> Thugs rje chen po については, 川越 1993, pp. 463-465 を参照。
- <sup>63</sup> Zaṅs dkar ḥPhags pa śes rab は mÑaḥ ris の Zaṅs dkar に生まれ, Lo chuṅ Legs paḥi śes rab, カシミールの Jñānaśrībhadrā, Kha che dGon pa ba らに師事した。rTse lde 王が 1076 年に催した「丙辰の法輪」にも参加している。
- <sup>64</sup> [T. 4569: P. vol. 151] (DE. 395b: PE. 58b)
- <sup>65</sup> この記述は TKA, 54b に従うものだが, これに拠る限り Buddhaśānti の名前が示されないため, 『前半の注釈』すなわち「金剛界品」の注釈部分は Rin chen bzaṅ po の単独訳と誤解されるおそれがある。
- <sup>66</sup> 羽田野 1959, p. 44.
- <sup>67</sup> 羽田野 1959, p. 29 を参照。Eimer 1979a, p. 334 は蔵経本に比定しない。
- <sup>68</sup> DE. 221b の 'Maṅ yul gyi groṅ' に従ったが, PE. 439b は 'Maṅ yul gyi Kyi groṅ' とあり, Kyi groṅ を sKyid groṅ の異字と見ることもできる。
- <sup>69</sup> [T. 3947: P. 5343] の奥書 (DE. 241a: PE. 277b) を参照。
- <sup>70</sup> Cf. NGA, 62b; JNY, 52b; DNG, ca. 4a; KCS, 57a, 68a-b.
- <sup>71</sup> NGA, 63a は 'dge bśes lo tsā ba daṅ bla ma gñis kyis bsgyur ro' と述べ, Nag tsho と Atiśa の共訳であることを明示するが, 他方 JNY, 53a は NGA の下線部分を記述しないので, 直前に述べる翻訳師 dGe baḥi blo gros を指す可能性もあり, あいまいな記述である。
- <sup>72</sup> Cf. DNG, ca. 5a; KCS, 68b.
- <sup>73</sup> [T. 4569: P. vol. 151] (DE. 374b: PE. 41b). cf. TKA, 37a.
- <sup>74</sup> Atiśa 伝は mÑaḥ ris に 3 年という数字を明示しているわけではないが, NGA, 57b, 63a, 69b から解釈されるように, Pu raṅs に 1 年と行き帰りの Maṅ yul での各 1 年とを合計して mÑaḥ ris での 3 年と理解できる (羽田野 1966, p. 446 を参照)。
- <sup>75</sup> Atiśa 伝は Pu raṅs (NGA, 62a; JNY, 53a) とする。
- <sup>76</sup> mÑaḥ ris 地方を sTod (上), Bar (中), sMad (下) に区分する場合, Maṅ yul は mÑaḥ ris smad に含まれる。
- <sup>77</sup> この点は Nag tsho が, Atiśa はチベットに 1 年以上滞在することはないと語ったことから推測できる (cf. NGA, 63b; JNY, 52a; 羽田野 1966, p. 446, n. 10)。
- <sup>78</sup> KCS, 66b, 415a は「水のえ午」の年に Atiśa はチベットに到着, また PSJ, p. 364 は「水午」にチベットの mÑaḥ ris, Maṅ yul, Guṅ thaḥ, Tho liṅ に到着, という表現をする。異説は RMB, 1; PRM, p. 7 に, 「土のと卯」(1039) の年に『讃』と『Lam rim』によれば, Jo bo は mÑaḥ ris に到着」とある。



- <sup>79</sup> 名は rGyal baḥi ḥbyuñ gnas (1004/5-1064)。ḥBrom ston については KCS, 84a-105a, 羽田野 1965a, pp. 411-415 を参照。
- <sup>80</sup> JNY, 63a は Atiśa の bSam yas 寺到着は〈亥〉の年という説を、それが引用文であることを示唆する ‘ces ḥbyuñ ste’ 「と (別なものに) 出ている」という語句を挿入して示す。しかし、JNY の著者 (mChims) の見解は本来 ‘Lug’ とあった原文がかすれて、‘Phag’ に誤ってしまったと述べて、その説を採らない。
- <sup>81</sup> 羽田野 1966, pp. 447, 450 を参照。
- <sup>82</sup> DNG, kha. 13b は「sNa nam rDo rje dbaṅ phyug が 67 歳の〈水のえ午〉の年に Jo bo rje (= Atiśa) は mÑaḥ ris に到着した。そして sNa nam 72 歳の〈火のと亥〉の年に bSam yas に来たといわれる」と述べる。sNa nam の生年は〈火のえ子〉の年といわれ (DNG, kha. 11b; RMA, 11a; PRM, p. 6), それは A.D. 976 年に換算できるので、この〈火のと亥〉は 1047 年に相当する。〈火のと亥〉説は KCS, 415a; KGT, da, p. 304; RMB, 2a 等に見られる。異説として羽田野 1966, pp. 456-458 は問題の〈亥〉の年を NGA (75b が典拠であろう) と mKhas grub rje (cf. T. 5463 A, 22b) とに基づいて〈木のと亥〉の 1035 年とする。この〈木のと亥〉説は KSN, 4a; PSJ, p. 367 にも見られる。
- <sup>83</sup> ここでは bSam yas 寺の護法神を意味する。Tucci 1950, p. 56 は Pe har/dPe dkar/dPe har が本来、Vihāra (寺院) に対応する語であるという Laufer の見解を正しいと認め、寺院を意味するその語が Chos skyoñ (護法神) に転化したのは、寺院を守護する神として寺院が擬人化されたからだという。
- <sup>84</sup> DNG, ca. 8a-b. DNG, ca. 4b によれば、Atiśa が mÑaḥ ris の Gu ge に滞在していた時、Rin chen bzañ po が Atiśa に brGyad stoñ pa [T. 12: P. 734], Ñi khri snañ ba, brGyad stoñ ḥgrel chen [T. 3791: P. 5189] 等、以前に翻訳された多くのものを校正するよう頼んだと述べる。この点は KCS, 59b にも同様な趣旨が見られ、実際、Ñi khri snañ ba を除く二典は Atiśa と Rin chen bzañ po が校正したことが奥書から知られる。Ñi khri snañ ba に関しては、蔵経本でそれを確認できないが、いずれにしても、Nag tsho や rÑog Blo ldan śes rab の翻訳以前に別の訳本があったのかもしれない。
- <sup>85</sup> [T. 4569: P. vol. 151] (DE. 431a: PE. 108a), TKA, 85b.
- <sup>86</sup> CBC, 127b に ‘dkor mdsod pe har gliñ du nor ḥjog’ 「宝物庫 Pe har 院に財宝を奉安した」と述べることから、この院が bSam yas 寺の創建当初から宝物庫の役割を有したことが知られる。その院の宝物庫の北側に Atiśa の小さな寝室があったという (cf. NGA, 73b; JNY, 63b)。
- <sup>87</sup> KRN, 25b. Atiśa 伝 (NGA, 16a; JNY, 13b) は Padmasambhava が bSam yas 寺に将来したという (cf. CMB, 332a)。
- <sup>88</sup> NGA, 16a, 78a; JNY, 13b, 67b.
- <sup>89</sup> KCS, 59b は bSam yas で dBu ma phuñ po lña pa (『五蘊論』) 等、多くの法を訳出したという。
- <sup>90</sup> [T. 4569: P. vol. 151] (DE. 393b: PE. 56b)
- <sup>91</sup> Cf. DNG, ca. 10b.
- <sup>92</sup> rÑog ston については KCS, 75a-76a, 羽田野 1956, pp. 8-9 を参照。
- <sup>93</sup> 名は brTson ḥgrus g-yuñ druñ (A.D. 1011-1075)。
- <sup>94</sup> 名は dBaṅ phyug gshon nu (NGA, 64a) または Byaṅ chub gshon nu (JNY, 53b)。Se btsun については羽田野 1956, p. 13 を参照。
- <sup>95</sup> sKa ba については KCS, 81b を参照。
- <sup>96</sup> NGA, 81a, ‘ra sa ḥphrul snañ gtsug lag khañ chen du || śā kyahī dge sloñ rñog btsun legs śe yis || gsol ba btab nas yi ger bkod pa yin || shes bya ba de jo boḥi gsuñ yin | mtshan ni mar me mdsad ces grags pa yi || mkhas pa chen poḥi gshuñ lugs su ḥdsin pa || gol baḥi lam du mi ḥgro shes || nag tsho tshul khirms rgyal ba smra || bya ba yod pa de lo tsā baḥi gsuñ yin gsuñ |’
- <sup>97</sup> [T. 3929] (DE. 96a) の訳記のみは訳者名を Nag tsho しか挙げない。

- <sup>98</sup> [T. 3929] (DE. 96a) 'ra sa ḥphrul snañ gtsug lag khañ chen du || mar me mdsad dpal shes byaḥi mkhas pa la || bod kyi rñog btsun legs paḥi śes rab kyis || gsol ba btab nas bdag gis bsgyur ba yin || gnas brtan mar me mdsad dpal gyis || gshuñ lugs skyes bu gsuñ ḥdsin pa || grol baḥi lam du mi ḥgro shes || nag tsho tshul khriṃs rgyal bas smras ||'. なお、この偈文は重複する Atiśa 小部集の版には見られない。
- <sup>99</sup> 羽田野 1965b, p. 167 は『開宝篋』を当てる。
- <sup>100</sup> NGA, 69a-b; JNY, 59a; KCS, 47b; LKD, 17b-18a.
- <sup>101</sup> Atiśa 伝 (NGA, 81a; JNY, 70a) は『思釈炎』を翻訳したとまでは述べない。しかし、DNG, ca. 9a, ca. 31b によれば、lHa sa 滞在中に Atiśa と Nag tsho とが翻訳したと解釈できるし、KCS, 59b-60a も同様に、lHa sa で『思釈炎』が Atiśa と Nag tsho によって翻訳されたと述べる。
- <sup>102</sup> 江島 1980, p. 10 を参照。
- <sup>103</sup> Bhavya の呼称とその著作の問題は江島 1990 に論じられている。それによれば、6 世紀の Bhāviveka が『中観心論』とその注釈『思釈炎』を著し、それらは『デンカルマ目録』で翻訳中の書目に挙げられているものに相当する。そして 11 世紀に Atiśa が、Bhavya の手になる新しい『思釈炎』を請来してチベット語に訳したという (江島 1990, p. 840)。
- <sup>104</sup> この著者名は奥書や目録に記されないが、DNG, ka. 16b によれば、阿闍梨 Padma ḥbyuñ gnas が著作したと述べる。この Padma ḥbyuñ gnas が 8 世紀後半にチベットへ招かれたウディヤーナの Padmasaṃbhava であるかどうか確かでない。
- <sup>105</sup> 奥書 (DE. 70b: PE. 323a) は 'Ra saḥi gtsug lag khañ gi Ḥod mchog dños grub gtsug lag khañ' と記す。
- <sup>106</sup> DNG, ka. 17a は藏経本と同じ訳者名を挙げている。
- <sup>107</sup> この点に関しては、羽田野 1965b, pp. 172-176 に詳しい。
- <sup>108</sup> Bañ ston については、KCS, 79a-80a を参照。
- <sup>109</sup> この手紙は長短の差はあるが、多くの史書に引用されている (cf. NGA, 68b; JNY, 57a-58a; KCS, 89a-90a; DNG, ca. 7a; KGT, da, pp. 301-302)。
- <sup>110</sup> NGA, 97a は sñe thañ に合わせて 8 年住んだというが、これは後に挿入された細字の注記である。
- <sup>111</sup> Gar mi g-Yon druñ (NGA, 91b). Gar mi については、羽田野 1956, pp. 9-13 を参照。
- <sup>112</sup> A mes については、DNG, ca. 12a を参照。
- <sup>113</sup> Phyag については、KCS, 71b-74a を参照。
- <sup>114</sup> DNG, kha. 4b.
- <sup>115</sup> 藤田 1979, pp. 80-79 は徳光の戒品疏の敦煌写本 (Poussin Catalogue No. 632) と藏経本 [D. 4045: P. 5546] とを照合した結果、両本にはサンスクリット原本やその翻訳者の相違とか改訳などを想定すべき箇所は全く無いと述べ、藏経本が旧訳であることを保証する。
- <sup>116</sup> JNY, 86a; DNG, ca. 10a; KCS, 63a. ただし、NGA, 99b は十干を記さず、「午の年」という。

### 〈略号一覧〉

- CBC: Bu ston Rin chen grub, "Chos kyi ḥbyuñ gnas gsuñ rab rin po cheḥi mdsod", *The Collected Works of Bu ston*, pt. 24, New Delhi, 1971.
- CMB: Ñaṅ ral Ñi ma ḥod zer, "Chos ḥbyuñ me tog sñiñ poḥi sbrañ rtsiḥi bcud", R.O. Meisenzahl, *Die grosse Geschichte des tibetischen Buddhismus nach alter Tradition*, Sankt Augustin, 1985.
- DNG: ḥGos gShon nu dpal, "Deb ther sñon po", *The Blue Annals*, New Delhi, 1976.
- JNY: mChims thams cad mkhyen pa, "Jo bo rin po che rje dpal ldan a ti śaḥi nram thar rgyas

- pa yōṅs grags", *Ka-dam Pha-chos*, pt. 1, Gangtok, 1977.
- KCS: Las chen Kun dgaḥ rgyal mtshan, "bKaḥ gdams chos ḥbyuṅ gsal baḥi sgron me", Bibiothèque Nationale de Paris所蔵
- KGT: dPaḥ bo gTsug lag ḥphreṅ ba, "mKhas paḥi dgaḥ ston", Lokesh Chandra (ed.), *Mkhas-paḥi-dgaḥ-ston*, pts. 1-4, New Delhi, 1959-1962.
- KRN: bSod nams lhaḥi dbaḥ po, "bKaḥ gdams rin po cheḥi chos ḥbyuṅ rnam thar ṅin mor byed paḥi ḥod stoṅ", *Two Histories of the Bka'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*, Gangtok, 1977.
- KSN: Paḥ chen bSod nams grags pa, "bKaḥ gdams gsar rñiṅ gi chos ḥbyuṅ yid kyi mdses rgyan", *Two Histories of the Bka'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*, Gangtok, 1977.
- LKD: Don grub rgyal mtshan, "Legs par bśad pa bkaḥ gdams rin po cheḥi gsuṅ gi gces btus nor buḥi baḥi mdsod", New Delhi, 1985.
- MTL: Jo naṅ Tāranātha, "Myaṅ yul stod smad bar gsum gyi ṅo mtshar gdam gyi legs bśad mkhas paḥi ḥjug ṅogs", 『后藏志』 Lhasa, 1983.
- NBJ: Bu ston Rin chen grub, "rNal ḥbyor rgyud kyi rgya mtshor ḥjug paḥi gru gziṅs", *The Collected Works of Bu ston*, pt. 11, New Delhi, 1968.
- NGA: Bya ḥdul ḥdsin brTson ḥgrus ḥbar, "Jo bo rje dpal ldan mar me mdsad ye śes kyi rnam thar rgyas pa", 東北大学附属図書館所蔵
- PRM: Sum pa Ye śes dpal ḥbyor, "dPag bsam ljon bzaḥ Reḥu mig", Lokesh Chandra (ed.), *dPag-bsam-ljon-bzaḥ*, pt. 3, New Delhi, 1959.
- PSJ: Sum pa Ye śes dpal ḥbyor, "dPag bsam ljon bzaḥ" 『松巴仏教史』 蘭州, 1992.
- RMA: ḥJam dbyaṅs bshad pa ṅag dbaḥ brtson ḥgrus, "Lo tshigs reḥu mig", *The Collected Works of Jam-dbyaṅs-bśad-pa'i-rdo-rje*, vol. 1, New Delhi, 1972.
- RMB: ḥJam dbyaṅs bshad pa ṅag dbaḥ brtson ḥgrus, "bsTan rtsis reḥu mig", *The Collected Works of Jam-dbyaṅs-bśad-pa'i-rdo-rje*, vol. 1, New Delhi, 1972.
- RZN: Khyi thaṅ pa Ye śes dpal, "Lo tstsha ba rin chen bzaḥ poḥi ḥkhruṅs rab dkaḥ spyad sgron ma", *Collected Biographical Material about Lo chen Rin-chen-bzaḥ-po and his Subsequent Reembodiments*, Delhi, 1977.
- TKA: Bu ston Rin chen grub, "bsTan ḥgyur gyi dkar chag yid bshin nor bu dbaḥ gi rgyal poḥi phreṅ ba", *The Collected Works of Bu ston*, pt. 26, New Delhi, 1971.
- YJC: Śākya Rin chen sde, "Yar luṅ jo boḥi chos ḥbyuṅ", 『雅隆史』 Lhasa, 1988.
- T (=東北目録): 『西藏大蔵経総目録』 (東北大学所蔵デルゲ版: No. 1-4568) 1934 (再版1970).  
: 『西藏撰述佛典目録』 (東北大学所蔵蔵外文献: No. 5001-7083) 1953.
- P (=北京目録): 『西藏大蔵経総目録・索引』 (大谷大学所蔵北京版) 1961 (再版1985).
- DE: Derge Edition (台湾刊行本)
- PE: Peking Edition (鈴木学術財団刊行本)
- Bendall 1883: Bendall, C., *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library*, Cambridge.
- Bhattacharya 1996: Bhattacharya, G., "An Incomplete Copper-Plate Grant Belonging to the Pāla Ruler Nayapāla", *Berliner Indologische Studien*, 9/10; 315-325.
- Chattopadhyaya 1967: Chattopadhyaya, A., *Atiśa and Tibet*, Delhi.
- Chaudhary 1975: Chaudhary, R., *The University of Vikramaśīla*, Patna.
- Dietz 1984: Dietz, S., *Die Buddhistische Briefliteratur Indiens*, Wiesbaden.
- Dutt 1962: Dutt, S., *Buddhist Monks and Monasteries of India*, London.
- Eimer 1977: Eimer, H., *Berichte über das Leben des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*, Wiesbaden.
- Eimer 1979a: Eimer, H., *Rnam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa*



- (*Dīpaṅkaraśrījñāna*), Teil 1, Wiesbaden.
- Eimer 1979b: Eimer, H., *Rnam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa* (*Dīpaṅkaraśrījñāna*), Teil 2, Wiesbaden.
- Eimer 1983: Eimer, H., "Stotra. The Hymn of Praise in Eighty Verses", *Atiśa Dīpaṅkar Millennium Birth Commemoration Volume*, Calcutta; 1-8.
- Eimer 1989: Eimer, H., "Nag tsho Tshul khrims rgyal ba's Bstod pa brgyad cu pa in its Extant Version", *Bulletin of Tibetology*, New Series, 1989-1; 21-38.
- Ferrari 1958: Ferrari, A., *Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*, Roma.
- Locke 1989: Locke, J.K., "The Unique Features of Newar Buddhism", T. Skorupski (ed.), *The Buddhist Heritage*, Tring; 71-116.
- Majumdar 1943: Majumdar, R.C., *The History of the Bengal*, vol. 1, Patna, Rep. 1971.
- Sircar 1971: Sircar, D.C., *Studies in the Geography of Ancient and Medieval India*, Delhi.
- Sircar 1977: Sircar, D.C., 'The Pāla Chronology Reconsidered', *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Supp. 3; 964-969.
- Tucci 1950: Tucci, G., *The Tombs of the Tibetan Kings*, Roma.
- Tucci 1956: Tucci, G., *Preliminary Report on Two Scientific Expeditions in Nepal*, Roma.
- 江島1980: 江島恵教『中観思想の展開』春秋社
- 江島1983: 江島恵教「アティーシャの二真理説」『龍樹教学の研究』大蔵出版; 359-391.
- 江島1990: 江島恵教「Bhāvaviveka/Bhavya/Bhāviveka」『印度学仏教学研究』38-2; 846-838
- 川越1993: 川越英真「Dīpaṅkara-rakṣitaについて」『知の邂逅—仏教と科学』佼成出版社, 455-471.
- 羽田野1959: 羽田野伯猷「密教者としてのアティーシャ—とくに時輪の問題をめぐって—」『宗教研究』33-1; 14-52.
- 羽田野1960: 羽田野伯猷「菩提心法者としてのアティーシャ」『中野教授古稀記念論文集』中野教授古稀記念会編・刊; 145-163.
- 羽田野1965a: 羽田野伯猷「衛へのアティーシャ招請—その背景と歴史的意義—」『密教学密教史論文集』高野山大学編・刊; 411-428.
- 羽田野1965b: 羽田野伯猷「チベットにおける仏教観の形成について」『文化』29-2; 165-195.
- 羽田野1966: 羽田野伯猷「アティーシャおぼえ書—年代考—」『印度学仏教学論集』平楽寺書店; 439-460.
- 藤田1979: 藤田光寛「敦煌出土瑜伽論チベット語遺文I」『密教文化』126; 80-63.